

学位論文の要約

論文題目：古代日本語助動詞の研究——「推量」の背後

申請者：古川 大悟

本論文では、古代日本語の中で従来広く「推量」と称されてきた助動詞について、個別の助動詞の意味用法の分類列挙にとどまらず、助動詞相互の関係に留意しながら体系的な意味記述を行うことを目的としている。特にマシ、ム、ベシという三種の助動詞を対象とする。

本論文は全3部（第Ⅰ部～第Ⅲ部）、全5章（第1章～第5章）から構成されている。第2章の内容に関わり、参考論文を付している。

第Ⅰ部「助動詞マシの論」は、第1章・第2章から成る。

第1章「助動詞マシの意味」では、マシの基本的意味が「ある事態を可能性として提示し、他の可能性と比較する」点にあることを述べている。上代のマシは、既実現済みの可能性と、実現しえない（しえなかつた）可能性の二者の比較に用いられている。なおかつ、マシによって提示される後者の可能性の方が、言語主体にとって望ましいものである場合に偏っている。それに対して中古のマシは、望ましくない事態の可能性を提示する場合もあり、また三つ以上の可能性の比較を担う場合もある。マシの用法が拡張していると考えられる。このように上代と中古で分布に異なりはあるものの、「ある事態を可能性として提示し、他の可能性と比較する」というマシの基本的意味は通底している。また、このようなマシの意味記述によって、萬葉集や源氏物語などの作品の中で従来解釈が難しいとされてきたマシの用例についても、妥当性の高い解釈が可能となることを示した。

第2章「上代特殊語法ズハの成立と衰退」では、マシと深く関わる特殊語法ズハの消長を論じている。通常の仮定条件を表すズハ……マシから、特殊語法のズハ……マシが成立するには、二つの要因が働いていることを示した。第一には、上代～中古初頭に限って見られる「強い欲求」を表すマシの用法と、それに伴うマシの作用域の変化である。第二には、「恋ひつつあらずは」に代表される類型的表現の存在によって、前件が現実事態であることが担保されたことである。そして、強い欲求を表すマシの用法の衰退と、競合する汎用性の高い表現が充実していたことによって、特殊語法ズハが衰退したことを述べている。本章は第1章で示したマシの意味記述の応用例であると同時に、その妥当性の例証ともいえる実践である。またここでは接続表現を扱ううえで、構文的な要因が接続関係の変容をもたらすことにも言及している。

なお参考論文「カラニ考——上代を中心に」は、構文が接続関係を変化させることを論じており、第2章のズハの考察における構文論的視点を支える議論である。カラ（ニ）が理由・帰結関係を表す順接から逆接へと変容していく原理を跡づけた論であり、喚体文という文環境の中で用いられることが、順逆の関係を変化させる要因として働いたことを指摘している。接続表現を単に個別的な語彙の意味論として分析するのではなく、構文論的な視野のもとで考察することの重要性を訴える論であり、ズハの記述に通じる主張を含んでいるため、参考論文とした。

第Ⅱ部「助動詞ムの論」は、第3章のみから成る。

第3章「助動詞ムの意味」では、ムの意味の出発点を意志とみなし、後発的に推量が派生したという仮説によって、ムの用例の整合的な説明が可能になることを示している。ムの意味を最大公約数的に「(単なる) 想像」のように捉えるだけでは、マシをはじめとする他の「推量」の助動詞との差異を説明するこ

とが難しく、体系的な整理に至りがたい。また、意志と推量が背反的な相異なる意味であるとする、意志とも推量ともみなせる中間的な用例の存在と矛盾する。そこで、ムの意味の起点が意志であるという仮説を設定した場合、意志内容の実現が疑われる場合から、実現される可能性とされない可能性が想像されることを介して、後発的に推量が派生するという説明が成り立つということを示した。この過程で可能性の比較を生じることになるため、結果的に一部マシとの重なりが生じてしまうことも整合的に説明できる。また、ムはク語法形マクをもつが、マシとベシはク語法形をもたないことから、ムは意志する・推量するという作用そのものを表し、事態をいかなるものとして把握するかを表すマシやベシとは質を異にすることも指摘している。本章に至って、ムとマシの関係はきわめて明瞭になり、またベシとの関係についても見通しを得られる。

第Ⅲ部は、第4章と第5章から成る。

第4章「助動詞ベシの意味」では、特に連用形ベクの用例検討を通して、ベシの意味を「～でしかありえない、他の可能性はありえない」という必然性・不可能性に関わるものと規定している。従来、ベシの意味を対象的意味・作用的意味の二種に区分するという整理が行われてきたが、両者は構造的に不可分であり、どちらを表すかによって用例を二種に分類できるものではない。ベシは、対象的に見れば提示された事態が必然的に生起するものであることを表し、作用的に見れば提示された事態を必然的なものとして把握するという認識を表している。第1章で論じたマシが、事態をありうる（ありえた）可能性の一つとして把握するものであったことを踏まえると、可能性・偶然性という意味領域を担うマシと、必然性・不可能性という意味領域を担うベシが対をなして存在していると考えられる。マシとベシの関係を明確化する論である。

第5章「ベシの意味記述と作品解釈の架橋——『応久』をめぐって」は、第4章で論じたベシの理解に深く関わる作品解釈である。第4章のベシの意味記述の応用例であると同時に、ベシの意味研究にさらなる示唆を与える実践でもある。萬葉集の巻七・一三〇九番歌について、まずその訓を「風吹きて海こそ荒るれ明日といはば久しくあるべし君がまにまに」とする。そして第四句「久しくあるべし」について、主体である女自身が「逢うことが先延ばしになったら私は必ずや待ち遠しい思いになる」というように、必然的に生じるであろう自身の心理を述べたものと解する。第4章の必然性・不可能性という意味規定の応用である。従来は女が男の心理を推し量る媚態を含んだ表現と解されてきたが、そのような解釈が一般化した背景には、近代以降ベシを「推量」とみなす理解があったと考えられる。また、当該歌のような「～ば……べし」という「假定条件+ベシ」という構文は、確かに「推量」的な作用的意味の卓越を許容しやすい形式であり、このような例がベシに作用的意味の卓越をもたらす契機となった可能性があることを指摘している。

以上を踏まえ、マシ、ム、ベシの意味と関係について次のように結論づけることができる。他の可能性もありうる（ありえた）という意味で可能性・偶然性という意味領域を担うマシと、他の可能性はありえないという意味で必然性・不可能性という意味領域を担うベシが対をなして存在している。これら二つの助動詞は事態をいかなるものとして把握するかを表すものであり、純粹に意志する・推量するという作用自体を表すムとは次元を異にしている。ムは意志を出発点とし、意志内容の実現が疑われることを介して、実現される可能性とされない可能性が想像されることを経て、推量へと派生したものと考えられる。その過程で可能性どうしの比較が生じているため、結果的に一部マシと重なりをもつことになったといえる。本研究は「可能性・不可能性」「必然性・偶然性」という概念を導入することで、「推量」の助動詞の意味的体系的をこのように整合的に説明した点に意義がある。

(三〇五九字)